

# 凋落の「途辿る歯科の「政治力」

## 「健全歯維持管理料」は見果てぬ夢か

神戸市議会議員・元国会議員政策秘書 岡田裕一

「他の組織が2〜3年かけてやる選挙だ。期間的に無理だった」日本歯科医師会の政治団体「日本歯科医師連盟」の準組織候補として、自民党・全国比例区から参院選に出馬した比嘉奈津美氏（前衆院議員）は7月22日、都内で行った会見でそう語り、肩を落とした。

### 候補が「総倒れ」

18年11月、再選に最後まで執念を燃やしていた石井みどり参院議員は、ついに次期参院選出馬を断念した。引き換えとして石井氏には、参院決算委員長という花道が用意され、同月中に日歯連は兵庫県議で歯科医の高橋進吾氏を候補として擁立する方針を決定。しかし19年1月、高橋氏は突如出馬を辞退した。すでに県議としての自身の後任には神戸市議が公認を受

けており、高橋氏は春の統一選を経て、政界を引退することになってしまった。

体調不良が理由とのことだったが、同じ神戸で活動する私が見ても、彼の健康状態は良好だった。本当の理由は、彼が全国区に出馬するに際し、各都道府県に事務担当者をおくべく準備していたが、これもあろうにお膝元である兵庫県に担当者がない反社会的勢力との関係が記事の準備を始めた。その動きを事前に察知した日歯連がただちに立候補辞退を迫った、というのが実情だ。

全国の歯科医師連盟（歯連）の浮いた票はどうするか。永田町では自然と、比例へのくら替えが取りざたされていた吉田博美・参院幹事長の支援に回すこととされた。18年の党総裁選でうまく取り切った吉田氏への官邸からの「ご褒

美」との噂も流れた。

しかし地方歯連から歯科医を擁立すべきだとの声が強まった。16年の参院選では元東京都杉並区長の山田宏氏を擁立したため、それに続いて吉田氏を、となると、比例区では「自前の議員」がいなくなる。そうこうするうちに、吉田氏自身が4月に脳腫瘍を発症し、政治活動の継続が困難になったため、この話も消滅した。

歯科医の比嘉氏を候補とするところが決まったのは、ゴールデンウィーク前になってから。選挙期間は2カ月余り。もともと厳しい戦いだったのだ。

そもそも石井氏が迂回献金事件で、自身の後援会が献金を受けていたため、次期出馬は困難ではないかと言われていた当初から、日歯連の高橋英登会長が事件の責任を取って辞任し、代わりに参院選に立候補する、という噂もあった。

体の4割近くを占めている。しかし、健全歯維持管理料を創設し、国民がむし歯でない状態を維持する診療行為に報酬を与えれば、国民のむし歯がなくなっても歯科医も困らない。補綴物を維持管理するよりずっと道理に適っており、共感も得やすい。補綴物は貴金属を使い精密な技工を要するが、そんな高価なものも最終的には歯と一緒に失われているからだ。

森田学・岡山大学教授らによる歯科治療の採算性を検証した論文では、1位はレジン充填、2位は定期健診であるとのこと。実は世情で思われているより、定期健診は採算性がよいのだ。虫歯治療の歯科から、定期健診の歯科への転換が今こそ必要だと言える。

### 歯科界に「富士フィルム方式」

私の選挙区で開業する親しい歯科医の友人は「歯科界復活のモデルは富士フィルムにあり」と語る。同社はフィルム事業部が将来の需要減を予測し、化粧品、製菓などフィルム以外の事業を育て、現在

しかし、その発想自体が「迂回立候補」以外の何ものでもなく、これも立ち消えた。

その後、兵庫や大阪の歯連関係者から有力候補として名前が挙がったのは、神戸市議で歯科医の橋本健氏だった。橋本氏は神戸市で「歯科口腔保健推進条例」を議員提案条例として成立させるなど、実行力に定評があった。

しかし、元SPEDの今井絵理子参院議員との「一線は越えていない」不倫の後、政務活動費の不正受給が明るみとなり、議員辞職のみならず、執行猶予付きの有罪判決まで出てしまったため、この話も霧散した。

結局、石井氏、吉田氏、高橋進吾氏、高橋英登氏、橋本氏がすべてダメになり、最後の最後で貧乏くじを引いたのが比嘉氏だったのだ。その震源地たる兵庫・神戸にいた筆者の目にも、明らかに歯連の動きは芳しくなく、選挙運動自体を自粛・遠慮しているようにも見えた。

13年の参院選で日歯連は、組織内候補の石井氏に29万4148票は優良企業となった。一方で、ライバルであった米コダックは「フィルム事業こそ祖業」として変化に対応できず、倒産した。

歯科界はどうするか。「補綴こそ歯科だ！」として減り続ける需要にしがみつくのか。変化に対応できるものが生き残るというダーウインの進化論が、歯科界にも必要とされている。

しかし、そのためには、健全歯維持管理料を誕生させるだけの、医師会や薬剤師会に負けない政治力が必要だ。

ところで神奈川県歯科医師連盟のウェブサイトには、以下のよう

なQ&Aが掲載されている。

Q もし、「歯科医師連盟」組織を解散してしまつたら、どうなるの？

A 「医療は政治なり」と言われる位、医療は政治との関わりが強いものですので「歯科医師連盟」組織を解散した後は、歯科医師の発言力はなくなり「歯科医療・歯科保健」は衰退していく可能性があります。

その危惧は現実となりつつあり、歯科医療改革は遠のいている。

田口氏の歯科医療改革に追いつけない日歯



を集め、当選させている。ところが、迂回献金事件を経た16年の参院選で山田氏が獲得したのは14万9833票。文字どおり半減した。今回の比嘉氏に至っては、それを3万票以上下回る11万4596票だ。国民総医療費のなかで歯科が占める割合はかつて12%程度あった。しかし、それから20年近くが経過し、歯科の割合は年々低下したことで、現在では7%を切っている。歯科医の生き残りが厳しく問われる状況にあって、自前候補の落選は歯科界にとって致命的な打撃となった。

一方、そんなじり貧の歯科界の真ん中で地動説、コペルニクス的転回を唱える動きも現れ始めている。その旗手のひとりとも言える

のが、厚生労働省医政局の歯科技官である田口円裕・歯科保健課長（写真）だ。

彼の地動説は、従来までの「虫歯を削る・詰める」といった20世紀型歯科医療から、「患者の口内の状況を管理し、メンテナンスし、予防する」21世紀型歯科医療への転換、すなわち保険点数として「健全歯維持管理料」を創設してはどうか、というものだ。

20世紀の歯科治療の常識では、いわゆる「むし歯菌」であるミュータンスレンサ球菌とだけと戦っていたらよく、その巢となるカリエスの治療こそが仕事だった。だが、実はミュータンスレンサ球菌以外にもさまざまな菌が「う触」発症に関わっていることが近年明らかになってきた。そのため、むし歯菌だけを見るのではなく、口内全体でそうした菌が発生しやすい状態を管理することこそが重要ではないかと、考えられるようになってきた。

現在、歯科の診療報酬は補綴などのむし歯治療が全